



TITLE:

<大會抄録>居延漢簡の古文書學的研究

AUTHOR(S):

永田, 英正

CITATION:

永田, 英正. <大會抄録>居延漢簡の古文書學的研究. 東洋史研究 1987, 46(3): 649-649

ISSUE DATE:

1987-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154200>

RIGHT:

居延漢簡の古文書學的研究

永田英正

かつて『東方學報』に發表した「居延漢簡の集成」は、從來の居延漢簡研究が餘りにも記事のみを重視しすぎていることの批判の上になつて行つた研究で、いふなれば簡牘の古文書學的な研究を旨とした第一段階の研究であつた。そしてそこでは、居延漢簡の中でも多數を占める簿籍簡牘すなわち簿（帳簿の類）や籍（名簿の類）の内容を構成する簡牘を取り上げて簡牘の諸様式を確認するとともに、簡牘をグループとして扱う道を開いた。

ところで古文書學の定義からすると、一般に記録の集積である簿や籍は嚴密な意味では文書とはいえない。しかしそれが報告書ということになる、簿籍といえども文書であり、簿籍簡牘はたとえ斷片であっても文書として扱うことができる。一九七三年から七四年にかけて發見された新居延漢簡中の「襄他莫當縣守御器簿」の冊書は、そのことを示す貴重な資料で、簿籍簡牘の古文書學的研究を可能とした。

その研究の結果、最末端の縣そして候、それらを束ねる候官といった各機關でどのような簿籍がどのようにして作成され、またそれはどのように報告されたかといったことが明らかとなり、漢代の簿籍の制度を中心に多くの新しい知識を得ることができた。本日はその中でもとくに縣と候で作成する簿籍とその報告の仕方に焦點をしばつて考察し、併せて漢代の文書行政の特徴について述べることに

する。

天津山西會館碑刻その他

寺田隆信

天津には山西會館が二つあつた。一つは乾隆二六年設立の舊會館で、河東區糧店後街七號が所在地である。他の一つは嘉慶一二年に建設がはじまり、十數年をへて道光三年に完工した新會館で、現に紅橋區估衣街一二〇號に遺構を存する。前者はすでに姿を消しているが、後者は舊觀を大きく失つてはいるものの、今も中學校として使用され、解放直前の時期までは二つの碑刻をのこしていた。また、その附近には當行公所があり、ここにも二つの碑刻が存在した。以上四つの碑刻は、現在、その所在は不明とされるが、一九四四年二月、仁井田陞博士によつて調査記録され、天津地區における山西商人の活動状況をうかがう資料として利用することができるとする。タバコ、鹽、典當、雜貨が主要な營業種目であつたらしい。一方、北京における會館碑刻資料は、日中雙方の調査によつて明らかで、これによつて山西商人の當地における活動の實態を知ることができる。以下、これらの資料にもとづいて、京津地區における山西商人の活動を追つてみようと思う。